理系と連携 アプリ開発

経営・渥美ゼミ 学生ITコンテスト優秀賞

経営学部の渥美幸雄ゼミの3年次生が3大学と連携し、スマートフォンアプリの企画開発を行った。2種類のアプリのうち一つはITコンテストで優秀賞を獲得した。

同ゼミは「モバイル情報通信サービスとビジネスプラン」がテーマ。3年次生は、公立はこだて未来大学、神奈川工科大学、法政大学と合同で実施している「ミライケータイプロジェクト」に参加している。今年度はリーダーの鈴木萌生さんをはじめ7人が企画やビジネスプランづくりを担当し、「まっぴん」と「Mono－Chika」（モノチカ）を開発した。

渥美教授（左端）、企業関係者と渥美ゼミ生＝最終報告会

「まっぴん」はGPSの位置情報と組み合わせ、ユーザーが特定のエリアに入ると情報が受信され、エリア外に出ると自動的に消去されるアプリ。大学の講座やスーパーの特売品の周知などでの活用を想定する。情報を届けたい企業や団体の利用料で運営し、ユーザーは無料で、その場その時に必要な情報を探さずに得られる。11月28日に開催された「学生ITコンテスト2017」（神奈川県情報サービス産業協会＝神情協＝主催）で優秀賞を獲得した。

もう一つのアプリ「モノチカ」は、欲しいがどこで売っているか分からない物を探し当てるアプリ。未来ではPOS（販売時点情報管理）システムの規格が統一されると想定し、特定エリア内で多数の企業の在庫状況を一斉に検索できる機能を目指す。在庫増減の通知や予約機能を有料化することで収益を得る。

これらの活動成果について、渥美ゼミと他大のプロジェクトメンバーが12月20日、生田キャンパスで最終報告会を開き、開発意図や収支計画を発表した。

渥美ゼミの2、4年次生に加え、神情協に加盟するIT企業2社の関係者も聴講。「モノチカはこだわりの品を探せるアプリにしたほうが有料コンテンツに集客しやすいのでは」「二つともアイデアは面白い。収支面の詰めをもう少し厳しくして」との助言を得た。

4大学の学生は6月と11月に伊勢原セミナーハウスで合同合宿したほか、毎週、ビデオ通話でリーダー会議を開いた。鈴木さんは「渥美ゼミ以外は理系の大学・ゼミで、理系ならではの考え方や技術に触れ、学ぶことが多かった。社会人と接することで仕事の進め方も勉強できた」と話した。

報告書を手に青木さん、石崎教授、山田さん（左から）

大学生意識調査プロジェクト

経営・石崎ゼミ 2学生参加

経営学部の石崎徹ゼミの青木翔太さん、山田真帆さん（ともに3年次）が、「第23回大学生意識調査プロジェクト」（公益社団法人東京広告協会主催）に参加し、他大学の学生とともに「大学生1000人にきいた『マナー』に関する意識調査」に取り組んだ。

プロジェクトには首都圏で広告やマーケティングを学ぶ6大学（専修、青山学院、駒澤、上智、千葉商科、日本）の有志約30人が参加。調査項目の選定、アンケートの実施と回収、データ分析を行い、報告書にまとめた。

昨年12月の記者発表会でプロジェクトチームは、「今、マナーが悪いのは大学生（65・1％）」「ついやってしまうマナー違反第一位は歩きスマホ（29・6％）」「時代遅れ・無意味なマナーが多い（42・6％）」など調査結果を報告した。「デジタルは進化、マナーは悪化」「マナーの基準は世間の目より友達の目」「合理的という名の自己解釈」など五つのトピックスを導き、現在の大学生のマナー常識を「忖度（そんたく）と損得」として定義。「マナーの境界線を引き直す必要があるのではないか」と発表した。

8カ月間の活動を振り返り、青木さんは「価値観の違う学生と意見を交わし、一緒に活動することで自分の殻を打ち破ることができた。大学生活の大きな財産になった」。

山田さんは「何か大きな活動に打ち込みたくてプロジェクトに参加した。アンケートの手法や物事を論理的に捉える思考法などを学ぶことができた。ゼミ活動とプロジェクトを妥協せずにやり遂げたことは、今後の就職活動や社会人として仕事をする上で自信になる」と話した。

ネットワーク情報学部2年次生 多摩区&専大 魅力を映像で表現

優秀8作品を表彰

ネットワーク情報学部2年次生の専門科目メディアプロデュースプログラム応用演習の成果発表と優秀作品の表彰式が1月25日、生田キャンパスで開かれた。

2年次生36人が川崎市多摩区と専修大学の魅力をCM映像にした36作品（個人制作）と、かわさき市民活動センターの登録団体をPRする映像（グループ制作）10作品が披露され、個人制作の中から優秀作品8点が表彰された。

審査を担当したのは川崎市多摩区と専修大学広報課、同入学センター、担当教員の福冨忠和教授、藤原正仁准教授ら。川崎市多摩区長最優秀賞は太田樹里さんの「私を見守ってくれる街」。朝日に輝く多摩川の水面や緑の雑木林などの自然が映し出される。1人の若い女性を温かく包み込むような映像が印象的な作品だ。

多摩区役所の川戸大輔課長補佐は「今回の作品は多摩区の豊かな自然と人との関わりが優しく描かれていた。長くこの街に住みたいと思わせるような映像に仕上がっていた。ナレーションもやわらかくとてもよかった」と評価した。

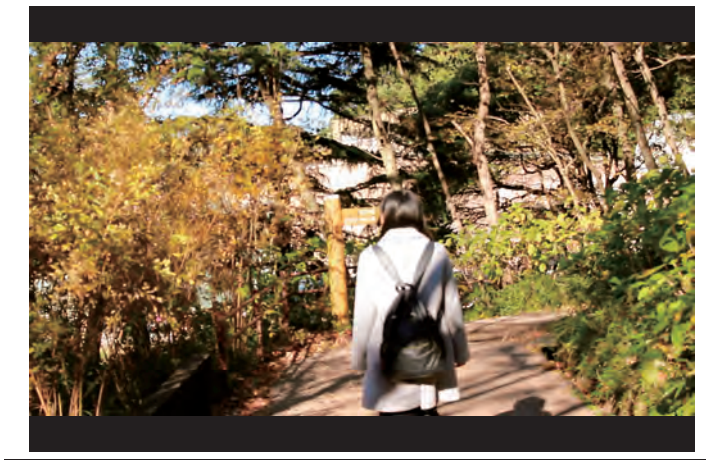
太田さんは「実家を離れて2年がたち不安だったり、寂しさを感じたりすることもあったが、多摩川の美しさや豊かな自然に随分癒やされた。この思いを映像に込めた」と話す。

藤原准教授は「映像制作は撮影前の調査、いろいろな人との調整、交渉力が必要とされる。こうした力はとても大切なことで、社会に出てからもさまざまな場面で役立つ」と意義を語った。

そのほかの入賞者は次の通り。（敬称略）

▽川崎市多摩区長優秀賞＝名古屋元暉▽広報課最優秀賞＝長谷川優菜▽同優秀賞＝村野優作▽入学センター優秀賞＝井上雄太▽教員特別奨励賞＝山本直哉、鈴木日南乃、悴田明日香

作品を紹介するパネルを展示し、制作意図を学生が解説㊤



多摩区長最優秀賞を受賞した太田さんの作品のワンシーン㊦

ネット情報学部長賞 ―― 2個人・3グループに

ネットワーク情報学部の2017年度学部長賞に2個人、3グループが選ばれた。1月23日、生田キャンパスで行われた表彰式で松永賢次学部長から賞状が授与された＝写真。

表彰式は1年次生向けのプログラム説明会に合わせて行われ、受賞者が後輩に向けアドバイスを送った。

TOEICで835点の高得点を獲得した福村耕平さん（4年次）は「3年間の継続が結果につながった。情報分野に限らず、何か打ち込めることをみつけてほしい」と呼びかけた。

若手クリエーターが挑む映像作品コンテスト「my Japan Award 2017」で審査員賞を受賞した藤原正仁プロジェクトを代表して、新妻航介さん（3年次）は「コンテストはアイデア勝負。技術を学ぶだけでなく、考える力、企画力を磨くことも大切」と語った。

受賞者と受賞理由は次の通り。（敬称略）

【個人】

▽福村耕平（4年次）TOEIC835点

▽後藤駿治（3年次）「第11回TOHOシネマズ学生映画祭」準グランプリ、「my Japan Award 2017」優秀賞

【グループ】

▽伊藤圭祐、倉持黎、中村未来、鎌田凌平（全員3年次）「第1回かんとうNPO映像祭」優秀賞

▽高野祐一准教授プロジェクト（青山透、小山寛治、金子葉月、高橋良介、永沼瑞穂、長野雄大、松浦優＝全員4年次）「平成28年度データ解析コンペティション（OR部会）最終発表会」技能賞

▽藤原正仁准教授プロジェクト（伊藤晴哉、榊俊平、上條志帆、後藤駿治、新妻航介、渡邊郁弥、上田颯人、藤田英里香＝全員3年次）、「my Japan Award 2017」審査員賞